
メガネの魔法 2 ～ 愛しい人の捕まえ方～

シマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネの魔法 2 ～愛しい人の捕まえ方～

【Nコード】

N5893P

【作者名】

シマ

【あらすじ】

休日に偶然会った部下は、一目惚れの相手だった。無理矢理デートの約束を取り付けたけど……「メガネの魔法」その2。山崎課長の気持ち

「イチ……お前はご機嫌だな……」

助手席の足元で嬉しそうに尻尾を振る飼い犬を、これほど憎らしいと思ったのは初めてだった。

「君は、イチって言うの？お利口に座って可愛い」

助手席に座る楽しそうな部下の横顔に、溢れる笑みを隠す為、片手で口元を押さえた。

「課長、その角のアパートが私の家です。ありがとうございます」

「そう、来週の日曜に10時に迎えに来るから」

「いや！本当に、もう十分です」

「飼い主としても、上司としても気が済まないから、悪いけど付き合って貰うよ」

「……はい」

再び断りそうだった彼女から、無理矢理承諾を取り付けて帰宅した。

彼女の上司でもある俺、山崎匠（やまさきたくみ）は、三十を前にして情けない話。会社で見かけた彼女に一目惚れした。同じ課に

配属になって一年半。真面目でのんびりとした彼女の人柄に触れ、消えるかと思った恋心は更に加熱した。

次の日、前日の強引な約束を、彼女が取り消さないか気が気じゃなかった。そんな時、聞こえて来た会話に俺は絶句した。

「遠藤さん、その腕のアザはどうしたの!？」

「わあ! シー!! 静かにして下さい! 昨日、転んでぶつけただけですよ」

「なら隠さなくても」

会議室に忘れ物をして取りに戻ると、片付け中の女子社員の話し声。彼女は転んだのか? あの後、メガネを買いに行った先で? 浮かぶ疑問は、彼女の一言で解決した。

「いや……この歳で公園で転んだって……恥ずかしくないですか?」

「……私なら隠す」

「でしょう? だから内緒にして下さい! 特に課長はだめです!」

「何で課長? まあ、分かったわ。湿布あるけど貼っとく?」

心配する同僚に気を使ったのか、彼女は惚けた返事をしていた。

「……臭いませんか、その湿布……」

「何を！？人の善意を仇で返したね！」

中から聞こえる笑い声。

中にいる彼女の同僚に、嫉妬した自分に舌打ちしながら会議室のドアを開けた。

開けた瞬間、固まった様に動かない彼女達には目もくれず、置いたままのファイルを取ると黙って部屋を後にした。

横目で確認した彼女のアザは、痛々しいほど色が変わり、昨日、気付かなかった自分に苛ついた。

自分のデスクで、深いため息が漏れる。あのアザで普通に仕事をこなす彼女に、かなり驚かされた。

「課長、お茶です」

顔をあげると、彼女が笑みを浮かべながら湯呑みを置いた。そのまま、戻ろうとした彼女の手を思わず掴み引き留めた。

「課長、何か？」

「いや……腕は大丈夫か？」

「……何の話ですか？」

昨日のメガネといい。今日のアザといい。あくまでも知らない振りをする彼女に苛立ち、掴んだ手に力が入った。

彼女の顔が痛みで歪んだ時、昼休みを告げるチャイムが鳴った。

「あの……」

「話があるから、ちょっと来なさい」

腕を引きそのまま使われていない会議室へ入ると、鍵をかけ彼女を閉じ込めた。驚いた表情の彼女の腕を掴み袖を捲ると、左腕の肩の辺りから肘にかけて白い肌が赤黒く変わっていた。

「何故、昨日のうちに言わなかった？」

慌てて腕を隠した彼女は、俯いたまま何も話さない。そんな態度に更に苛つき、顎を掴み無理矢理上を剥かせた。

「何故、隠す」

「こ……これ以上迷惑をかける訳には」

「誰が迷惑って言った？俺は、そんな事、言った覚えはない」

「課長……」

何故か”課長”と呼ばれる事に腹が立つ。彼女の前では、パワーフェイスも形無しだ。それなのに彼女は、全く変わらない。

「なんか不公平だな」

「へえ？」

間拔けな声を出した彼女の唇に、そっと近付き唇を塞ぐと、真っ赤な顔で固まっていた。

「……信じらんない」

「遠藤？」

「……初めてだったに！！」

ドン！

思い切り突き飛ばそうとして伸ばされた腕を掴むと、赤い顔を隠そうとして名一杯反らす。

そんな仕草が可愛くて、もう一度その唇に触れなくなった。いや、ここで無理強いは良くないな。

「今からでも、病院に行きなさい。それだけ色が変わっているなら動かすのも辛いはずだ」

「……仕事が終わったら行きます」

「昨日といい、今日といい……君は強情だ」

「課長は強引過ぎです。……本当に次の休みに行くんですか？」

彼女の言葉に、胸がチクツと痛んだ。やはり、嫌だったのか？そう思うと、自然と眉間にシワが寄る。

「何故？」

「いえ……チケット代くらい自分で払いますから、金額を教えて下

さい」

不機嫌になった俺に返ってきた意外な返事に、笑いが溢れた。

「課長？あの……」

「俺は、君より歳も役職も上なんだから気にしなくていい。黙って奢られればいい」

「無理ですよ。私の性分ですから」

唇を尖らせて拗ねる彼女が可愛くて、再び、唇を寄せるとドアの前へ移動した。

「チケット代は貰ったらね。迎えに行くから逃げないように」

一言残して部屋を出ると、中から聞こえた彼女の叫び声に笑いが漏れた。

「2回もするな〜山崎のスケベ!!」

初めてのキス

そう思うと自然と顔が緩む。

さて、次はどんな手を使って誘うか、楽しみになってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5893p/>

メガネの魔法 2 ～ 愛しい人の捕まえ方 ～

2011年2月8日20時25分発行